



第57号

福岡貿易会情報誌 福貿ニュース

新年あけましておめでとうございます



公益社団法人 福岡貿易会
会長 土屋直知



福岡市長
高島宗一郎



謹んで新春のお慶びを申し上げます。

会員の皆様方におかれましては、日頃より会の運営と発展にご理解とご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

昨年、元日付で「地域的な包括的経済連携（RCEP）協定」が発効し、世界のGDP、貿易総額及び人口の約3割を占める巨大な経済連携協定が誕生してスタートしました。2月にはウクライナ紛争が勃発、3月には急激な円安が進行、長引くコロナ禍の影響でサプライチェーンが寸断されるなど、世界規模の経済変動が相次ぎました。

また昨年は、1972年の日中国交正常化から50周年に当たり、半世紀にわたる両国の交流の歴史を振り返ること、その強い絆を改めて確認することができました。

今後、目を向けますと、脱炭素化の潮流はすでに世界共通の課題として広く認識されているところであり、自動車業界のEVシフトや、DX（デジタルトランスフォーメーション）化によるビジネスモデルの再構築、ICT（情報通信技術）やAI（人工知能）の積極的な活用など、国境を越えて幅広い分野で大きな変革をもたらしています。

また今年、日・ベトナム外交関係樹立50周年に当たり、これまで連綿と築き上げてきた良好な両国関係が、更に深化・拡大する年となることでしょう。

福岡貿易会では、こうした様々な経済環境の変化に対応するべく、貿易関連情報の発信や会員間交流の促進を通じ、情報交換を活発化させる取り組みを進めてまいります。会員の皆様方には、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

本年が、皆様にとってより一層の飛躍と発展の年となりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

あけましておめでとうございます。

福岡貿易会におかれましては、日ごろより福岡市の貿易振興及び地域経済の発展に多大なるご貢献をいただき、心から感謝申し上げます。

昨年、市民の皆様にご信任いただき、引き続き、福岡市政の舵取りを担わせていただくことになりました。皆様からのご期待を背負う責任の重さに、改めて、身が引き締まる思いです。

これまで福岡市は、「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」を目指し、都市活力を高めるためのチャレンジを行った結果、国内外から「元気な都市」として評価をいただくようになりました。

福岡市では、今年から本格的に、まちづくりの長期計画である「マスタープラン」の策定をスタートします。次代を担う子どもや若者の意見も取り入れながら、市民のみなさんと一緒に作り上げていきます。

また、3月には、地下鉄七隈線がついに全線開通を迎えます。天神ビッグバン、博多コネクティッドでのビルの建替えも進み、福岡市が持続可能で、国際競争力の高いまちへと生まれ変わる大事な1年になると期待しています。7月には、世界水泳選手権が開催されます。日本や世界が未来に踏み出すきっかけとなるよう、全力で大会を成功へと導きます。

今後も「人」「環境」「都市活力」が高い次元で調和したアジアのリーダー都市の実現に向けて、果敢にチャレンジしていきたいと考えておりますので、福岡貿易会の皆様のご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



令和4年度 欧州経済視察団 報告

福岡貿易会 専務理事 平塚 伸也
事務局長 淵上 誠司

前日から現地ガイドに必ず雨が降るので傘を持参するように散々脅され、朝ポルトからの高速道路移動中のバスでも、フロントガラスを打ち付けるひどい豪雨に見舞われた。しかし2022年12月4日のサンチャゴデコンポステーラは雲一つない快晴であった。

今回の欧州経済視察では日本から荷物の中に忍ばせた折り畳み傘を一度も開くことなく、9泊13日のすべての行程を無事に終えることができた。

振り返ると、今回の欧州経済視察は準備段階から大変なドタバタで始まった。

福岡市とボルドー市との友好姉妹都市締結40周年の記念事業としての経済交流会への参加を主とする「食」、「環境」及び「スタートアップ」を視察目的とする欧州経済視察団の派遣を企画し、仏/ボルドー、西/サンセバスチアン、ビルバオ、サンチャゴデコンポステーラ、葡/ポルト、リスボンを歴訪する行程を計画しようとしたが、福岡市とボルドー市との公式行事の日程調整が遅々として進まず、「春か」、「夏か」、「秋か」と言われていた両市の公式行事日程がぎりぎりまで決まらず、福岡市より2022年11月29日か30日がボルドー市との公式行事として内定した旨が伝えられたのは出発2ヶ月前の9月中旬になってからであった。

事務局では急ぎ福貿会活性化推進会議での議論や旅行代理店との打ち合わせを開始し、視察行程案作成やflight scheduleのプラン作りに着手したが、折り悪く新型コロナ禍、ロシアによるウクライナ侵攻、燃料高に加え想像を超える円安も重なり、なかなか成案を得るのに手間取ってしまった。視察行程案たたき台作成後、早々に参加者募集を開始したが、出発までに日にちが短かったため、予てよりの参加意向表明者の中でも他行事との日程調整が困難であったこと、一部参加希望者が帰国時に必要とされる新型コロナワクチンを接種していなかったり、外国籍の希望者がフランスの入

国ビザを取得するのに手間取ってしまったこと(いずれも参加を断念)、かなり高額な旅行費用となってしまったこと、12月1日が訪問予定国ポルトガルの独立記念日にあたることから、どうしてもトータルの旅行期間が長期に亘ってしまうこと等から、3年ぶりの海外視察団派遣に経験のない現事務局による通常の募集方法では参加予想人数が非常に少なく、視察団の組成そのものが危ぶまれる事態となった。そんな中、土屋会長が個別に企業トップに視察団への参加を強く呼び掛けるとともに、事務局支援のため甲斐特別顧問の全面的な力添えを頂戴できたことで、何とかフル日程のAコース、短期コースのBコース及び現地参加のCコースを合わせて26名の団員の参加を得られたことで、何とか視察団を構成することができるようになった。

ところがロシアによるウクライナ侵攻の影響から、ロシア上空を飛行できず、いずれの航空会社とも平和時と較べ日仏間のflight time scheduleが長くなっており、福岡からボルドーまでの通常想定される乗り換えができず、航空会社決定にもかなりの紆余曲折もあった。

また、最終的に関空出発便での訪欧となったが、これまた時宜悪く、関西万博開催準備のため、会議室や各航空会社が運営するラウンジが閉鎖され利用できない等のトラブルにも見舞われた。

11月27日(日) 福岡空港集合、17:55ピーチ航空で関空へ。関空到着後、ホテル日航関空「桃李」にて結団式。(ワールドカップ日本はコスタリカに敗戦)同23:30エミレーツ航空EK317にてドバイへ。(11h15m)

11月28日(月) 5:45ドバイ着、同7:50 EK73にてパリへ。(7h35m)

同12:25パリ着、同16:30 AF7634にてボルドーへ。(1h15m)

同17:45ボルドー着。

11月29日(火) シャトーアンジェリウス視察。時期的に収穫も終わり、今年の水の仕込みも終了したばかりであったが、焦がし方で味や香りが異なるという木樽で16か月熟成させた後、瓶詰直前にblendする過程や、全工程に3年掛かるというワイン醸造の現場を視察した。サンテミリオン、ボルドー市内視察。



シャトーアンジェリウスにて

午後7時からボルドー市庁舎にて表敬訪問から始まる一連の式典が催され、福岡貿易会/土屋会長、中村副会長、津田副会長、並田相談役、福岡商工会議所/永江副会頭、中園部会長の6名が、視察団を代表して参列。土屋会長からボルドー市ユルミック市長に対し記念品が贈呈された。その後ユルミック市長主催による招待宴に出席した6名であったが、旅行代理店の連絡の手違いもあり、市庁舎からホテルに戻るバスの手配がうまくいかず、徒歩でホテルまで戻らざるを得ないというハプニングがあった。今では笑い話だが、出席者6名にはご迷惑をおかけした。



ボルドー市長表敬

記念品贈呈

11月30日(水) ボルドーテクノエスト、メトロポール社にてスタートアップインキュベーションの実情について視察・意見交換した。



ボルドーテクノエスト社

ワインレクチャー風景

ボルドーワイン委員会にて福岡にも所縁のある内田氏よりワイン全般のレクチャー受講。AOCワイン等原産地が明確なワインやどこで作られたのかに拘りを持つ独特の世界観を聴取した。ボルドー全体で年間5.2億本のワインが生産され、うち57%が中国、米国、英国向けを中心に輸出されるが、金額では香港、中国、英国の順になる由。ここでも環境認定栽培やビオロジック栽培など、環境に配慮したワインが好んで飲まれるようになっているとのこと。

午後、福岡市主催経済交流会参加。高島市長による福岡市プレゼン実施、後援団体代表として福岡貿易会/土屋会長、津田副会長、福岡商工会議所/永江副会頭も登壇の上記念撮影。



壇上記念撮影

参加者全員による記念撮影

その後福岡祭り(西福製茶/西社長もブース出展)に参加するも、残念ながらボルドー市側からのフランス人や企業の参加者は少なく、福岡貿易会からの視察団26名は会場を埋めるのに大きな役割を果たしたも
 福岡祭りにて
のと思う。逆に言えば福岡貿易会が視察団を出していなければ、人もまばらで大変寂しい「福岡祭り」だったのではないかと。

12月1日(木) 陸路サンセバスチアンに移動。ランチにミシュラン3ツ星「AKELARE」にてスペインの美食を体験・堪能。夜はサンセバスチアンのバル巡りで福岡の屋台文化に類似する食文化を経験。(ワールドカップ日本はスペインに逆転勝利)ホテルでの朝食を除く、ほぼ毎日のランチと夕食にそれぞれ約2時間の時間をかけ、おいしい食事に舌鼓を打ち、ワインを頂くという食通には堪らない行程を満喫したお陰か、全員少しずつ体型に変化が出てきた模様。

12月2日(金) (Bコース離団・帰国) バスククリナリーセンター食の大学にて、食材の仕入れ、下拵え、調理からサービスまでを一貫して「食

学」として捉え、世界各国からの留学生も受け入れている実態を見学した。



バスクリナリーセンター

陸路ビルバオへ。ビスケヤ橋、旧造船業の街ビルバオ視察、グッゲンハイム美術館視察。

同19:30 VY2702にてポルトへ。(1h20m)

同19:50ポルト着。

12月3日(土) ポルト市内視察。ポルト商工会議所ビル視察。ポートワイン・ワイナリーグラハム視察。ポルト駅視察。



ポルト商工会議所

ワイナリーグラハム

12月4日(日) 陸路キリスト教三大聖地のひとつサンチャゴデコンポステーラ(キリスト12使徒のひとり、聖ヤコブを祀る)へ、歓喜の丘訪問。往復の高速道路では、窓を強く打ち付ける雨を浴びながらのバス移動であったが、冒頭に紹介した通り、歩いて回ったサンチャゴデコンポステーラでは、信じられないくらい青空に一点の雲もなく、快晴の聖地巡礼を満喫した。



歓喜の丘「聖ヤコブ像」

12月5日(月) 燃料電池バス・カエタノ社(1946年設立。もともとバスのbody-builderとして事業を行っていたが、内燃機から電動化への流れを受け、電気バス、燃料電池バスの製造に参入した。トヨタ自動車技術提携、三井物産出資先)

視察。環境に配慮した電気バス、燃料電池バスの他、ロンドンバスや、車幅が広く座席が少ない空港用のCOBUS(その後ドバイ空港での搭乗ゲートから飛行機までの移動に実際に乗車した)等の製造現場を視察した。特に2019年販売開始の水素バスは80台以上の生産実績があり、ドイツ向けの販売が最多とのこと。現在の生産能力は700台/年だが、5年以内に2,000台/年に増産見込み。



カエタノ社 社長(中央)

カエタノ社工場

同12:00 TP1939にてリスボンへ。(1h)

同13:00リスボン着。ロカ岬、シントラの街視察。大航海時代のエンリケ航海王子やバスコ・ダ・ガマ、マゼラン、フランシスコ・ザビエルに始まるポルトガルが最も繁栄した時代に思いを馳せ、当時の新大陸発見の興奮を感じながら歴史に触れた。

同夕は、翌日視察予定のAGS社に出向中の丸紅からの駐在員を囲んで会食し、ポルトガルでの事業運営状況等について意見交換した。

12月6日(火) 丸紅100%出資のコンセッション方式で水道事業を運営するAGS社の協力でAGUAS de CASCAIS社よりプレゼン聴取するとともに同社取水施設を視察した。1999年の国際入札の結果2000年に落札、2001年より現在11.8万人の顧客向けに上下水事業を運営中。上水はリスボン市より調達し、顧客向けに売水しており、現在の無取水率は12%にまで低下している。15か所の取水場、21か所の貯水池(91,000m³)、1,400kmの水道管を有し、トータルで790kmの下水配管を持っている。我が国ではまだまだ民間による水道事業の運営事例は少ないが、今後民活方式による事業運営が増加してくるものと思われ、将来の日本におけるコンセッション事業の参考になる話が聞けたものと思われる。

同昼は在ポルトガル日本大使館大使公邸を訪問し、牛尾大使他より日葡関係や、ポルトガルの最新事情についてお話を伺った。たまたま同



牛尾大使(中央)を囲んで

大使は、この後の任地が南アフリカに決定したばかりで、当会欧州経済視察団を受け容れたのがポルトガルでの最後の公務となるとのこと。翌日には南アフリカへの転任を控え一時帰国する超多忙日程の中受け容れて頂いた。

同午後、ジェロニモス修道院視察。

同夕、リスボン地場民謡のFADOを聞きながら解団式を行った。

12月7日(水) 13:35 EK192にてドバイへ。(7h25m)

12月8日(木) 1:00ドバイ着。3:05 EK316にて関空へ。(9h)

同17:05関空着。19:35 MM159にて福岡へ。20:55福岡着、解散。

道中、風邪を召され、一部に体調を壊された方もいらっしゃったものの、心配していた新型コロナの感染者もなく、総じて皆さんお元気に行程をこなしていただき、飛行機の遅延や手荷物が紛失することもなく、兎に角ご無事に帰国いただけたのが何よりでした。

今回の欧州視察では、ワインを含む独特の食文化に触れ、学び、環境関連事業及び技術を視察し、スタートアップインキュベーションのあり方を視察したことで、参加いただいた皆さんには多くのことを学ばせかけをつかんでいただけたものと思います。

福岡貿易会では来年度以降も充実した内容での海外視察他多くの人材育成事業等を企画して参りたいと思います。各位のご鞭撻と一層のご支援を賜りますよう、本年も何卒宜しくお願い申し上げます。



《執筆者》

平塚 伸也 氏
(公社)福岡貿易会
専務理事



洲上 誠司 氏
(公社)福岡貿易会
事務局長

令和4年度福岡貿易会欧州経済視察団参加企業

社 名	
(株)インターナショナルエアアカデミー	博多港ふ頭(株)
エイケン(株)	(株)トクスイコーポレーション
(株)キャリアバンク	(株)西日本シティ銀行
九州大学	西日本鉄道(株)
(株)九電工	福岡市経済観光文化局
(株)JEC	(株)福岡銀行
西研グラフィックス(株)	(公社)福岡貿易会
(株)正興電機製作所	(株)福住
(株)セキュアサイクル	(株)山口油屋福太郎
津田ホールディングス(株)	三井物産(株)
(株)DLC・GBコンサルティング	(社名五十音順)



姉妹都市ボルドーと福岡貿易会

福岡貿易会 相談役 並田 正一



今回、福岡市とボルドー市の姉妹都市締結40周年を記念して福岡貿易会（以下福貿会）が経済団を派遣することに際し、現役員として最も古くから交流に携わって来た者として、少しでも両市の交流の歴史を知って頂きたい、長年に渡る交流の概要をまとめてみました。

ただ、姉妹都市締結をお手伝いして当時の事情に詳しく父（当会元副会長）が鬼籍にはいり、正直公的な資料も乏しいため、内容も小生の記憶を頼りに可能な限りまとめてみたもので、不完全なものです。交流のアウトラインでもご理解いただければ幸いです。

姉妹都市の締結実現まで

高度成長の時代、国際化の流れもあり我国の各自治体は競って海外の都市と姉妹都市の提携を進めていました。福岡市も御多分に洩れず米国・オークランド市、中国・広州市と姉妹都市の締結を行い、次は「欧州のどこかと…」というムードが出ていました。

そういう中で1970年代後半から九州日仏学館、仏大使館などの働きかけで福岡と似たフランス南西部に位置する地方有力都市であるボルドー市との縁組が浮上し、多くの関係者の御努力でこの話がまとまったのでした。交流の初期の関係者としては、現在、福岡で幅広くワイン・ビジネスを営まれているシードル・ニコラ氏の父君なども活躍されたと聞いています。



1982年11月8日の提携宣言書
(ボルドー市長は大戦中のレジスタンスのリーダー)

1982年11月姉妹都市締結

世界的に著名なボルドー市との縁組は、福岡市にとっても大層名誉なことである一方、当時「ジャパン・アズ・No.1」（1978年刊、エズラ・ヴォーゲル著）と日の出の勢いであった日本の都市との提携は仏側にとっても経済的な期待から歓迎すべき話だったと思われます。

1982年（昭和57年）11月8日、当時の進藤一馬市長ほか、市の幹部、関係者、福岡商工会議所の吉本会頭ほかの財界、マスコミ人から成る訪問団がボルドー入りしてにぎにぎしく締結式が挙行されるとともに、日本美術の展覧会も実施されました。当時のボルドー市長は仏政界の大物で仏首相を務めたこともあるジャック・シャバン・デルマス氏でした。以降、福岡市にとって“過ぎたる姉妹都市”として今日まで40年に渡る長いお付き合いがスタートしました。



1983年の市庁舎での歓迎パーティ
(中央左が津田鶴治氏、右は小生の母、並田悦子)

経済交流の核で福貿会が参加

ボルドー市との交流は文化、学術などの交流は言うまでもありませんが、本命は経済交流にあり、早速翌1983年5月に市は各経済団体を中心に「福岡市経済訪仏団」を派遣しました。この時、福貿会は市の武田助役が団長となって構成された同団に商工会議所などと共催の形で参加しました。福貿会からは福岡クロス工業の天岡惇氏、津田産業の津田鶴治氏に小生の父、西研工業（現・西研グラフィックス）の並田勇などが参加しました。

参加者の話では市庁舎でのパーティ、ボルドー商工会議所との晩餐会、ワインシャトー訪問、ボルドー大劇場での観劇など大変な歓迎ぶり、父と同伴していた母も和装で張り切って参列したと懐かしがっていました。

この翌年、1984年からボルドー市の要請で「ボルドー国際見本市」への福岡市の参加がスタートし、以降毎年、見本市が開かれる5月に概ね市の助役を団長に、各経済団体共催で「ボルドー国際見本市福岡経済視察団」を派遣することになりました。もちろん、福岡の企業も出展しました。そして、ボルドー訪問をベースに、視察団は毎回欧州各地での経済文化視察を組み込み、市の国際化を深化させることに大きく貢献していくことになりました。



1984年ボルドー国際見本市開会式
(開会式のプラスバンド吹奏は今でも恒例行事)



1988年 ボルドー市内での福岡市の答礼晩餐会
(中央は福岡市幹部)



1988年当時の大劇場<オペラ座>
(街の風景は周りの車の年式以外は今と殆ど変わらない)



1990年市庁舎での交流
(福岡市の記念品を贈呈するのは末藤助役)

国際見本市出展業務を受託

福岡市の業務スリム化計画の一環として1991年（平成3年）から当会がボルドー国際見本市への出展業務、経済視察団の派遣を福岡市から受託し、以降、福貿会がボルドー市との経済交流を一切取り仕切る重責を担うこととなります。この委託は10年ぐらい続き、この間毎年ボルドー・ミッションを派遣し、ボルドーとの関係が深まりました。



ボルドー国際見本市「福岡市ブース」のオープニング
(左端の女性が坂本助役、日本酒で乾杯)



1995年 サンテミリオンにあるシャトー見学
(「シャトー・アンジェリュウス」は今回、再訪問)



1996年 市庁舎訪問
(中央が団長の井口助役、左が市の通訳の藤島さん)

ボルドー訪問、周年派遣の歴史

今回、姉妹都市締結、40周年の記念派遣団となりましたが、これまで周年の記念訪問団は1992年に「10周年」、2002年に「20周年」、2012年に「30周年」の3回出しており、今回が4回目となります。

1992年は当会の天岡惇副会長（当時）が団長となり長醫常任理事など総勢18人で団を派遣、若き日の小生も末席で参加させて頂きました。ボルドーでの公式行事は盛大で当会の他、市、会議所もそれぞれ参加し、大訪問団がボルドーのホテルの宿泊料を高めました。団はボルドーの後、パリ、ブリュッセル、アムステルダム、ロンドン等を回り見聞を深めました。



1992年 市庁舎訪問
右端がメツサン市議、左端がモット会議所副会頭
(中央が眞鍋収入役、その左が天岡惇団長)

2002年の訪問団は福岡商工会議所の後藤会頭が団長となり「福岡市経済視察団」として経済団体を中心とする共催で当会も参加、ボルドーの後はマルセイユ、ニース、ミラノを回り帰国しました。



2002年 市庁舎での20周年式典
(左側が山崎市長、中央がアラン・ジュベ市長)



2006年6月 ボルドー市長主催のワイン祭り晩餐会
(庭園の草上でウエルカムドリンクはボルドー流？
左から3人目が中元副市長)

2012年は小生が福貿会の会長を務めさせて頂いた時期だったため、団長として「フランス・スペイン経済視察団」25人のメンバーを率いてボルドー市に出向きました。ボルドー市では、シャパン・デルマス氏の後を継いだ、これも首相経験を持つ大物市長、アラン・ジュベ氏と高島市長を含む懇談が出来たことも良い思い出となりました。高島市長とはボルドー訪問の後、スペインのバルセロナに回り、サグラダ・ファミリア教会の建設に携わっておられた福岡市出身の彫刻家の外尾悦郎氏の職場訪問と会食の機会を得、貴重な経験となりました。さらにボルドー入りする前にボルドーの東にあるトゥールーズのエアバス工場を訪問し、世界最大の旅客機エアバスA380の生産現場を見学出来たことも勉強になりました。



2012年 市庁舎での30周年記念式典
(左端が高島市長、挨拶は団長の小生・並田)



2012年 パーティ後、市庁舎前での記念撮影
(土屋現会長御夫妻の姿も)

今回の訪問の意義

今回いささかくたびれ気味の小生が団に参加させて頂いたのは提携40年を経て、姉妹都市交流に“交流疲れ”が出て来ているのではないかという老婆心からです。コロナ禍や経済の落ち込みにより交流に翳りが出て来ているのではないかという心配は小生だけでしょうか？

5月にピエール・ユルミック現市長が来福され、交流を再開されたことは大変嬉しいことで、姉妹都市を結ぶことも大変ですが、それを維持して発展させて行くことはそれ以上に大変なことだと思います。今回、コロナや市長選挙などが重なり、スケジュール的には随分無理な中で、何とか高島市長がボルドー訪問を実現して頂いたのは御同慶の到りです。さらに、スケジュール的に困難だと他の団体が訪問を断念した中で、これまで経済交流をリードして来た当会が、万難を排して経済団の派遣を決め、それも総勢26人という大ミッションをまとめて頂いた当会の土屋会長ほか事務局、旅行会社の努力と英断に深く敬意を表します。

今度の40周年記念の訪問で改めて姉妹都市交流を見直し、1982年の原点に立ち帰り、姉妹都市交流を一層深めて行ければと心から思う次第です。



番外 1995年 ボルドーのゴルフ場
(左から並田、西銀・川邊氏、物産・木村氏。
ボルドーは一時、英領だったのでゴルフが盛ん)



《寄稿者》

並田 正一 氏

西研グラフィックス(株)
代表取締役 会長
(福岡貿易会 相談役)



ガンバってます、会員企業！
(株)西日本日中旅行社 様



万里の長城



上海の摩天楼

(株)西日本日中旅行社は、長年にわたる中国渡航業務のノウハウを生かし、中国専門旅行社として各種の中国旅行企画手配、友好交流団、修学旅行、家族旅行、個人旅行、一般観光団体など中国旅行全般、中国からの訪日旅行を取り扱ってきました。その後、手配先を中国だけでなく世界各国に拡げ、お客様のご希望に沿った旅行の手配をしております。

2020年に入って間もなく、日本でもコロナが蔓延し始め、予約、発券を日常業務としていたものが、キャンセル、払戻しの作業へと変わっていききました。払戻し業務がすべて終わると旅行関連の仕事はほぼなくなったので、海外のお土産品を販売してみたりしました。が、いきなりの物販、どこをターゲットにすれば良いかもわからないまま始めたものが上手くいく訳がなく、買ってくれたのは1名のお客様と社員数名。

同年の秋にはおせち料理の販売を試みました。こちらはお土産品よりは売れたものの、それまでの業務の穴埋めになるはずもなく、ちょっと流行っているらしいからと試みたオンラインツアーは、参加者が集まらず不発に終わってしまいました。

このように、先の見通しが全く立たない中、雇用調整助成金の助けを借りながら、何とか存続してきました。

そんな中、長くお付き合いのあるお客様が、通常ならご自身でされるのであろう国内出張の手配を依頼して下さり、コロナが落ち着いたらまた頼むから頑張って、などと温かい励ましをいただくこともありました。

福岡貿易会のメールニュース「#コロナに負けるな」でもお世話になりました。

また、同業者が休業するにあたってお客様を紹介して下さり、明日は我が身と過ごす一方、大切なお客様をお預かりしたことへの責任感、コロナからの回復後には再び役に立ちたいという使命感を持ちつつ、たくさんの方々に助けをいただきながら、首の皮一枚というところで早2年半を過ごしてきました。おせち料理の販売は今年で3回目となりました。

そして、行動制限や入国制限の解除とともに、ようやく業務渡航や旅行の需要が戻ってきました。

コロナ禍で大半が運休となっていた福岡空港発着の国際線ですが、ベトナム、韓国、タイ、香港等、運航再開の動きが活発になり、直行便がなくても経由便でつなげる都市も増えています。コロナ以前と同様の往来ができるようになった国も増えてきました。

現在の弊社は、親会社がタクシー会社ということを活かし、タクシーと旅行を組み合わせた国内旅行商品を模索する一方、海外渡航の需要が戻った時、中国以外の手配へもすぐに対応できるよう、社内に新しくランドオペレーター部門を設置し、現地手配のご依頼にも備えております。



ホーチミン中央郵便局



サイゴン大教会

コロナ前と比べて変わっているかもしれない現地や航空券・ビザの情報、日々アップデートされて把握の難しい渡航条件など、最新のものを提供できるよう日々情報収集しています。

どこに問い合わせたら良いかわからない、というときにはお気軽に弊社へお尋ねください。

《寄稿者》

船越 道子 氏
(株)西日本日中旅行社



西福製茶の海外戦略～コロナ後の新時代に向けて

西福製茶(株)
代表取締役社長 西 宏史

2020年4月に緊急事態宣言は発令され、それまで当たり前のように行っていた海外出張が行けなくなり海外での展示会・プロモーションの計画がすべて白紙になりました。

10年以上かけて輸出拡大してきた海外のお客様との繋がりがプチンと切れてしまうのではないかと言う不安に襲われ、当然それ以上に国内での販売や生産についても先行き不透明でコロナの脅威を感じる日々が続きました。売り上げも飲食店やお土産、インバウンド需要も90～100%のマイナス。工場や店舗でのコロナ対策にも追われて、従来の仕事+コロナ対応は中小企業の経営者にはとてもつらい日々でした。

そのような状況で会社を救ってくれたのは海外のお客様でした。今まで取引して頂いた多くの国々では2020年5月以降には従来通り、もしくはそれ以上にご注文を頂きました。

お店に来店頂いていた海外のお客様もオンラインショップやメールでご注文頂き、落ち込んでいた売り上げも回復の兆しが見えました。8月には海外での新規取引も始まり、その年の決算では微増ですが業績を伸ばすことができました。

工場においても海外展開が必要とされたHACCPを2018年に取得していたので、衛生管理面でもコロナ対策がスムーズに実行でき、生産を落とさずに営業できたのも大きかったと思います。海外戦略で培ったノウハウは様々なところで役に立ったのです。

新しい期を迎えるにあたり、より海外戦略の重要性とスピードが求められると言うことでオンライン（Zoom等）を活用した国内外の商談会を数多く行いました。不慣れなオンラインも過去のノウハウを生かして商品価値やサービスを伝えることができ順調に新規取引に繋げていきました。

食品は試食や試飲ができないオンラインに不向きだと言われていました。しかし私にはそうは思えず、バイヤーや消費者目線で資料や話し方を工夫して八女茶の魅力を伝えていくことに努めました。実はコロナになってすぐに福岡貿易会主催のビジネス英会話や中国語講座を受講していたのです。その講座で

語学以上に海外の方の習慣やマナーなんかも知ることができて商談の場でも生かすことができるとても良かったです。

「自社の商品をもう一度見つめ直す。」これもコロナになった後に取り組んだことでした。売れ行きの悪い商品は当然ですが売れ筋商品もすべて見直しました。展示会やプロモーションを行っていた時はなかなか時間が取れなかったのですがいい機会だと割り切って新商品の見直しやリニューアルを行いました。常により良い商品づくりやサービスを提供していかないとお客様の満足度は上げられないからです。これは海外も国内も一緒です。

2021年になり国内の展示会が少しずつ開催されFOODEX、CAFERES JAPAN、FOOD STYLE 九州などに立て続けに出展して新商品・リニューアル商品を紹介していきます。

コロナの影響を多く受けていた飲食業界でも新しい動きがあり、飲食店向けの業務用の新規取引が増えた年でした。特に八女抹茶ペーストはコロナ前にもあった商品ですが飲食店向けのメニューや使い方・特徴をわかりやすくしたことで人気の商品になりました。お客様からよく「抹茶を使った商品やメニュー開発をしたいけど色が変わるから難しい」と言う意見が多かったので加熱しても色が変りにくい八女抹茶ペーストは多くのシェフやバイヤーから興味を持って頂きました。

2022年は今年こそは海外へと言う思いでスタートした年でしたが、なかなか海外への扉は開かず海外の情報や新しいニーズなどマーケティングを続けながら待っていました。

夏以降に海外の規制緩和が少しずつ進み、弊社も10月のパリのSIAL（EU最大の食品展示会）の出展、11月ニュージーランド視察が決まりました。



SIALにて

2年半ぶりの海外ミッションは過去の経験もありましたが新しい挑戦と思い準備を進めていました。ところが思った以上に海外の情報が集まらず苦労しましたが海外の取引先や今まで培った海外の人脈、そして何より九州から食を輸出しようと集まった「福岡フードビジネス協議会」の仲間からの情報で十分な準備をすることができました。

パリは過去にも訪れた場所でしたが空気感は日本のものとは全然違うもので日本のコロナからの脱却が世界に比べて遅れているような印象を受けました。所どころコロナの影響はあるもののパリの街は人で溢れており、海外からの観光客も多く感じました。入国の際にも戸惑うような手続きはなく、ストレスを感じることはありませんでした。

しかし、パリ市内の市場調査でスーパーを訪れたとき日本のものはかなり減っていた印象でした。中国や韓国の商品の方が目につきましたがアジアの食品の取り扱いが減っているようでコロナの様々な要因（生産・物流・販売促進）で影響を受けているようでした。

展示会初日は多少の不安を抱えてのスタートでしたが想像以上にブースを訪れて下さるバイヤーが多く、小売店・レストラン・商社・食品メーカーなど多くの方々と商談ができました。内容についてもコロナで制限ある中で取り組んできたことがバイヤーにうまく伝えることができ予想以上の成果を出すことができました。

パリにはその後11月末から再度訪問することになります。福岡市とボルドー市の姉妹都市40周年の経済ミッションに参加することが決まったのです。ボルドー市を訪問、前後でパリでSIALの商談先と再度打ち合わせを重ね取引開始に向けて前進しました。



経済ミッション参加

ボルドーでは八女茶の紹介やボルドー商工会議所の方々と経済交流や商談会の機会を頂いてパリと合わせてフランスの販路開拓ができました。初めて訪れたボルドーですが街並みの美しさやワインのおいしさはもちろんですが、ボルドーの方々との交流は

新しい海外ミッションを描く機会となりました。

ニュージーランドではZespri（キウイフルーツ）の本社で世界戦略や商品開発について学び、日本でも展開しているecostore（環境に配慮した洗剤などを製造）では環境問題やSDGsについての企業の取組を学びました。また先住民族マオリ文化も体験しました。ニュージーランド訪問は直接的にすぐに弊社の商品やサービスに直結するものではありませんが会社の方向性や未来の市場をイメージする上で重要な機会となりました。



ecostore



マオリ文化体験

パリでの販路拡大やボルドー市との姉妹都市の経済ミッション、ニュージーランド視察など様々な機会に積極的に参加することで、沢山の新しい発見があります。もちろん良いことだけではなく課題など問題点も多く見つかります。その一つ一つの問題を解決することでより良い商品やサービスを提供できると過去の経験から学びました。

海外の販路開拓は自社を成長させる機会だと考えています。企業としては売上・利益追求は当然のことですがその過程で生まれる気づきや課題が更に企業を成長させると思います。

海外のお客様からは日本国内では想定されない要求や取引条件を言われることがあります。それは必ず訪れる「日本の未来」なんです。コロナに対応できたのは輸出で培った経験が大きかったと感じています。

西福製茶は海外販路開拓を通して新しい商品や価値を作り出し、国内外のお客様に満足して頂ける企業を目指していきます。そのためには環境問題・生産能力向上・原料の安定供給・物流など多くの課題を克服していかなくてはなりません。

「八女茶を世界へ」を実現するために様々な取り組みを行い、これからもおいしいお茶を届け続けられる企業を目指します。



《寄稿者》
西 宏史 氏
西福製茶(株)
代表取締役社長



Photo by 前田典彦, 2019

去る2022年10月31日に、おおよそ隔月で恒例となっている福賀ビジネスラボ（第33回）が開催されました。その回では、私が表題にある「Black Hat USA」についてお話をいたしました。

「Black Hat USA」は、今年で25回目を数えるサイバーセキュリティに関する国際カンファレンスです。この分野に特化したイベントとしては、非常に歴史が長い部類に入ります。毎年7月末から8月上旬あたりに米国ラスベガスで開催されます。今年は8月6日～11日の日程で開催され、私も現地参加しました。全体の参加者数は2～3万人。米国開催なのでどうしても米国内からの参加者が多数を占めますが、参加者の国籍は100をゆうに超えると言われており、全世界から人が集まっていることが分かります。

Black Hat自体は、夏のラスベガス、冬（概ね12月ころ）のヨーロッパ（近年はロンドンで開催）、春（概ね3月～4月ころ）のアジア（シンガポールで開催）の3つがあり、また、過去にはドバイや東京で開催されたこともあります。内容としてはトレーニング、ブリーフィング、ビジネスホール、アーセナルの4分類があり、各開催で規模の多寡はありますが概ねこの4つが同時並行で行われます。

■トレーニング

文字通り、サイバーセキュリティの技術的な実地訓練・講義です。内容は総じて非常に高度で、講師陣も受講生も世界トップクラスの技術者・研究者が集います。トレーニングコースは100以上あり、1コースあたりの受講料は、概ね3,500～7,000USD（コースにより金額は異なる。4,000～5,000USDが多い。）と、規模も金額も破格ですが、専門家に



Photo by 前田典彦, 2019

DEFCONの様子

にとっては魅力あるものばかりです。なお、日本からの受講者もいますし、ここ数年は講師側で参画する日本人技術者・研究者も出てきています。

■ブリーフィング

調査・研究成果の発表の場で、プレゼン形式で行われます。例年開催期間中の最後の2日間、100程度度の発表が行われるのですが、複数同時並行（今年は9トラック同時並行）で実施されますので、参加者1人で全ての発表を網羅して現地受講することは物理的に不可能です。ですが、後日、オンラインでビデオを視聴することは可能ですし、全発表の資料とビデオのダウンロード権をパックにした商品が現地で販売されているので、見逃し配信的な視聴も可能です。

■ビジネスホール

いわゆる展示会・見本市です。日本でも各地で各業界大小様々開催されているものと類似しています。100社を超えるサイバーセキュリティ関連の企業・団体が出展します。米国企業が多いですが、世界各国からサイバーセキュリティ関連企業が集結していると言ってよいでしょう。また、アーセナルも同じ会場で開催されます。



Photo by 前田典彦, 2022

Black Hat Business Hall

■アーセナル

ソフトウェア・ツールを紹介するためのコーナーです。開発者自身がプレゼンして紹介するので、参加者が興味を惹かれるものがあれば、直接開発者と

意見交換できます。現場では、単に説明を聞くだけではなく、使い方・活用法のハンズオンなど、活発な交流が行われます。

ブリーフィングは、専門家（review boardと呼ばれます）たちによる厳正な審査を経て選抜された題材・人材による発表です。トレーニングとアーセナルにも事前審査がありますので、応募すれば発表・出品できるというものではありません。しかも、毎年その門は狭きものとなっています。よって、Black Hatでのブリーフィング登壇者、トレーニングのトレーナー、アーセナル出品者は、単にサイバーセキュリティの技術・研究に長けているというだけでなく、非常に名誉あることとして扱われます。なお、review boardになることは、更にむずかしいことですが、現在、日本からも2名がreview boardとしてBlack Hatの発展に寄与しています。

ブリーフィング受講には約3,000USD弱の費用がかかります。この参加費用には、アーセナル受講とビジネスホール入場も含まれます。日本円で40万円以上かかるわけですから、決して廉価ではありません。しかしながら、世界中から数万人規模で人が集まるわけは、最新技術動向の取得と同時に、人的ネットワークの確立・拡充・深耕が可能な場であることが大きいと思います。世界トップクラスの講師陣・研究者・技術者とプレゼン終了後に直接会話が可能です（英語と、その場での若干の勇気が必要です）。

ここで、Black Hat創設者であるJeff Moss氏について少し触れます。彼は1975年生まれの米国人で、コンピューター技術に長けたという意味でいわゆるハッカーです。オバマ政権時代にはHomeland Security Advisory Council（米国大統領行政府の一部局）のメンバーとして、米国政府のサイバーセキュリティ政策にも関与していました。25年前にBlack Hatというイベントを始めたわけですが、実は、その5年前に「DEFCON（デフコン）」というハッカーイベントがDark Tangentという人物によって創設されています。会場は同じくラスベガス。今日あつては、Black HatとDEFCONは連続日程で開催されています。

DEFCONは、ハッカーイベントという意味では



Photo from Wikipedia, 2012

Jeff Moss 氏

Black Hatと同様です。しかし、参加者数はBlack Hatの倍以上である一方、入場料は300USD程度とBlack Hatの10分の1です。Black Hatは、どちらかといえばフォーマル、あるいはビジネス寄りであり、スーツを着用して参加してもそれほど違和感はありません。一方、DEFCONは極限にカジュアル、一見成らず者とも思えるような風貌の来場者が目につくようなイベントです。コンセプトも、とにかくハッキング。その対象はコンピューターに限定されることなく、この世に存在するもの全てがハッキングの対象である、というコンセプトです。例を挙げると、物理鍵のピッキングトレーニングやコンテスト、行方不明者の捜索をインターネット上に散在する実際の情報を収集して実施するコンテスト、他にも、自動車、船舶、飛行機、ドローン、家電、電波、バイオ、倫理、暗号、クラウド、AI、Red Team/Blue Team、などなど、多種多様なテーマでハッキングの技術を競ったり、実際にハッキングを行ったり、ブリーフィングを聴講したりできるイベントです。

実は、Dark Tangentという人名は、Black Hat創設者のJeff Moss氏のハンドルネーム、つまり同一人物です。Jeffは、最初、米国内のハッカーたちが集う場としてDEFCONを始めましたが、その内容の高度さに比例せず（?）、あまりにもカジュアルすぎてビジネスでは取り扱いにくい（たとえば出張で行くのは気後れするあるいは普通の会社だと認めてもらえない）ようなイベントであったため、ビジネスとしても扱える形のカンファレンスとしてBlack Hatも創設。2つのイベントを同時期に同じ場所で連続日程で開催するようになった、という経緯があります。

最後に、COVID-19の影響について、現地参加した私の感想を述べます。ラスベガスの中心地では、屋内外双方とも、マスクを着用した人がほぼいませんでした。体感的には着用率は一桁前半%。Black Hat会場でも、街中と同様にマスク着用者は非常に



Photo by 前田典彦, 2022

少なかったです。そんな中でも東洋人系に見える参加者は、日本人も含めて比較的マスク着用者が多くいました。ただ、会場の数カ所に「Masks Strongly Recommended」という看板が設置されていたことから、主催者側としては、COVID-19感染拡大対策としてマスク着用を求めていることが伺えます。

Black HatよりもかなりカジュアルであるDEFCONでは、そのイベントの性格とは裏腹に、マスク非着用者は開催運営規則違反として取り扱うという措置が主催者によって取られていました（健康上など特段の理由がある場合は除く）。運営規則違反者は、原則退場あるいは入場拒否の対象になりますので、かなり強い措置と言えます。

一昨年（2020年）はCOVID-19の影響をまともに受けオンライン開催のみ、昨年（2021年）は現地+オンラインのハイブリッド開催だったものの入場者・出展社ともに例年に比べて非常に少なかったと聞きます。今年は、COVID-19パンデミック後、初めての本格現地開催となりました。Black Hat・DEFCONは、先に紹介したとおり、国際会議・展示会で最新情報を入手し、トレーニングでスキルを磨く場であり、同時に参加者・講演者・主催運営側・出展社が人的ネットワークを構築し信頼の輪（和）を広げるための世界的コミュニティとしても機能し

ていますので、興味のある方はぜひ現地に赴くことをおすすめします。ただ、福岡貿易会の会員各位におかれましては、社業が必ずしもサイバーセキュリティに直接関わるものではない方々が多くを占めると思いますので、費用をかけてこうした国際会議の場に社員を派遣することは難しいとお考えになる場合もあろうかと思えます。今年から貿易会に立ち上がったサイバーセキュリティ研究会では、今回私が報告・共有させていただいたような情報も含めて、サイバーセキュリティ関連の様々な情報を会員の方々にお届けできるよう様々な施策を企画していますので、研究会の参加も合わせてご検討いただければ幸いです。



《寄稿者》

前田 典彦 氏

株式会社 FFRI セキュリティ
社長室長

福岡貿易会からのお知らせ

今後開催予定のセミナー

※予定につき変更の場合があります。会員以外の方の受講も可能です。

○ 英文契約書講座 中級編

【日 時】 令和5年2月1日（水） 9:30～15:30
【会 場】 福岡商工会議所B1-a会議室
【講 師】 国際法務(株) 代表取締役 中矢 一虎氏
【受講料】 福岡貿易会会員 5,000円/一般 10,000円

○ 貿易実務の盲点とクレームの賢い対処法

【日 時】 令和5年2月2日（木） 9:30～15:30
【会 場】 ハイブリッド開催
会 場：福岡商工会議所B1-a会議室
オンライン：ZOOMミーティング
【講 師】 国際法務(株) 代表取締役 中矢 一虎氏
【受講料】 福岡貿易会会員 5,000円/一般 10,000円

○ 海外PLリスクマネジメントセミナー

【日 時】 令和5年2月8日（水） 14:00～16:00
【会 場】 オンラインセミナー（ZOOMウェビナー）
【講 師】 三井住友海上火災保険(株) 営業推進部
MS&ADインターリスク総研(株)
【受講料】 無料

○ サイバーセキュリティセミナー

【日 時】 令和5年2月16日（水） 15:00～17:40
【会 場】 ハイブリッド開催
会場：創ネット(株) 3階セミナー室
オンライン：ZOOMウェビナー
【受講料】 無料

○ 貿易保険セミナー

【日 時】 令和5年2月21日（火） 14:00～16:00
【会 場】 オンラインセミナー（ZOOMウェビナー）
【講 師】 (株)日本貿易保険
【受講料】 無料

○ 税関セミナー

【日 時】 令和5年3月9日（木） 14:00～16:30
【会 場】 オンラインセミナー（ZOOMウェビナー）
【講 師】 門司税関福岡空港税関支署 支署長
門司税関福岡空港税関支署 統括審査官
(通関総括部門)
門司税関業務部 原産地調査官
【受講料】 無料

<夜間講座>

○ ビジネス英会話講座上級編

【日 時】 令和5年1月19日～3月16日 全8回
毎週木曜日 19:30～21:00（除く2月23日）
【会 場】 福岡貿易会事務所
※緊急事態宣言発令の際にはオンラインに変更
【対 象】 目安として英検準1級、TOEIC800以上の方
【講 師】 Bill Fish 氏
【受講料】 福岡貿易会会員 18,000円/一般 27,000円

- 発 行/ 公益社団法人 福岡貿易会
☎812-0011 福岡市博多区博多駅前二丁目9番28号7階
☎ 092 (452) 0707 FAX 092 (452) 0700
- 発行日/令和5年1月31日 ● 印 刷/株式会社西日本高速印刷

